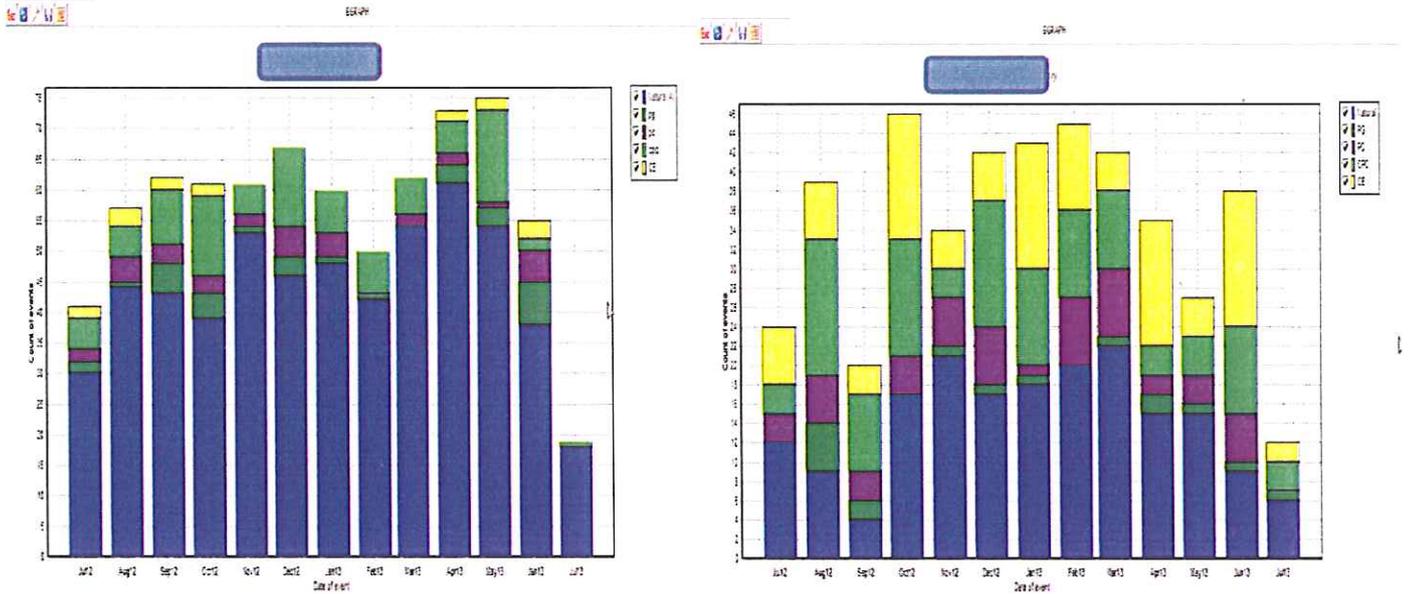


マネージメント情報 2013年 7月

1. 農場の人工授精が何によって行われているのかを知る

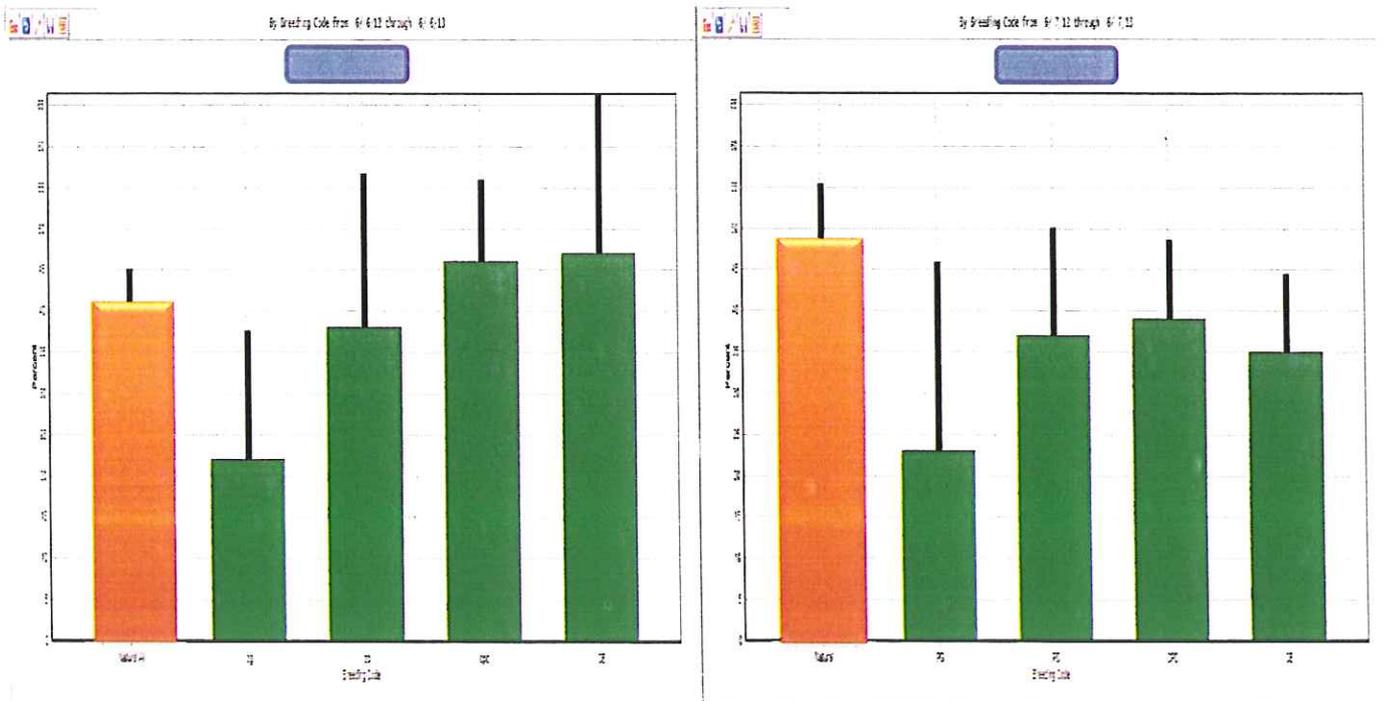
同じ人工授精が行われていても、農場ごとにそこに至るプロセスが違います。図1と2を見てみましょう。



A 農場

B 農場

横軸は1年間の各月を示しています。縦軸は、経産牛に対する人工授精頭数を示しています。その内訳は、青が自然発情、緑はオブシンク (CPC)、黄色はシダーオブシンク (CE)、紫はショートシンク (PC)、深緑がPG単味の投与です。(どう使い分けているかはまたの機会にします・・・) この2つの農場の人工授精の内訳には大きな特徴のあることが一目でわかりますね。規模の差はありますが、A農場では、経産牛に対して1年間で延べ743回の授精が行われました。そのうちの自然発情での授精が77%(570回)です。一方、B農場での自然発情での人工授精は、41%(185/447回)で、残りの約60%は何らかの処置によってはじめて授精が行われています。では、これらの農場での受胎率はどうなっているのか見てみましょう。



オレンジ色がそれぞれの自然発情での年平均受胎率です。A農場で41%、B農場では48%とB農場のほうが高くなっています。一方ホルモン処理した群の受胎率はどうでしょうか？ A農場ではショートシンク（PC）38%、オブシンク（CPC）46%、シダーオブシンク（CE）47%と、どれも自然発情と同等もしくはそれ以上の受胎率を示しています。B農場はショートシンク（PC）37%、オブシンク（CPC）39%、シダーオブシンク（CE）35%とそれぞれの成績が悪いわけではありませんが、自然発情の48%には及びません（統計的有意差はないけど）。PG単味の投与はどちらの農場でも、自然発情とはかなりの差がでています。この場合、考えられる理由はいくつかあります。① PGの単体投与は、まず卵胞の大きさで発情がばらつくことによる授精適期の判断が難しくなります、② PGの単体投与では、その20-30%に未排卵もしくは、排卵の遅延が見られるケースがあること、③ PGの単体投与を子宮回復のために行っているものに授精してしまっているケースがあることなどがあります。これらの理由から自然発情や他の処置による受胎率と差がでていていると考えています。この傾向はほかの農場でも同じです。

A農場では、授精にたいするホルモン処置にかかるお金も少なく、処置した受胎率も自然発情以上なのでその投資効果も高いと思います。B農場では、自然発情による受胎率が48%と十分あるのですから、自然発情発見へのためのマネージメントを強化することの検討が喫緊の重要課題であることが分かります。この農場で検診をすると無発情牛であれ、妊娠マイナス牛であれ、多くの牛で立派な黄体が確認できます。黄体がついていればホルモン処理（プログラム授精）の効果も高まりますが、同時にお金もかかってしまいます。立派な黄体があるということは、立派な発情がきているという証拠です。

繁殖管理における、ホルモン処置と自然発情の関係を常にモニターしておくことは、重要ですね。

2. 乳頭の清拭方法と体細胞数（乳房炎発生リスク）の違い

日本獣医師会雑誌に北海道デーリーマネージメントサービスの榎谷先生の乳頭の清拭方法と体細胞数との関係の論文が載っていました。農場現場の搾乳時の乳頭清拭方法を3つに分類して調査しています。

1. つまみ法：乳頭壁をつまむまたは握って、上から下に拭き降ろす方法
2. ひねり法：乳頭壁を手のひらで握り、ねじりながら拭き降ろす方法
3. 包み法：手のひらで乳頭を下から包むようにして拭く方法

結果は、図のようになっています。昔からジョンソンらも乳頭はねじり込むように拭くという方法を推奨していましたが、結果はまさにそのようでした。もう一度搾乳者とチェックしてみましょう。体細胞に影響するということは乳房炎の発生とも関連しているということです。夏場の乳頭壁ならびに乳頭口の清拭を徹底しましょう。

